



「サークル棟」

私の学生時代にもサークル棟と呼ばれる施設があって、木造二階建ての今にも崩れ落ちそうな校舎は、おそらく戦前には教室として使用していたものをベニヤ板で仕切っただけの粗末なものだったが、窓の外には大きなイチジクの木があって西日をさえぎり、油の匂いが鼻をつく長い廊下の床は吹き込んだ桜の花びらと埃がまみれ、ミシミシと階段を登っていくと踊り場の陽だまりにいつ頃からか住み着くようになった猫がニャーと無心してきたものだった。

私が学んだのは中大ではなく、下町にあった小さな単科大学だったが、紛争後のキャンパスには妙に華やいだ風が吹き、勧誘ビラを配るテニスルックの女子学生がまぶしく、気後れした足は自然と薄暗いサークル棟へ向かった。

タバコの煙がもうもうと立ち込める部室には、もう30歳を過ぎていそうなむさくるしい髭男T、活動家の恋人がいるという頭の切れそうなK女史、ガリガリに痩せこけ、どこかカマキリに似た病上がりSが待っていた。入部をためらう理由はどこにもなかった。翌日から私は毎日ここに入り浸り、彼らから当時の自堕落な大学生が行うありとあらゆる美德と悪徳を伝授された。不思議なことに大学の授業で何を習ったのかさっぱり記憶にないが、彼らから教わったことだけはすべて鮮明に覚えている。酒、麻雀の手ほどきに始まり、失恋の立ち直り方から卒論の書き方まで。

そして今、毎朝モノレールを降りると、左手のサークル棟やCスクエアからバンドの音や演劇の練習が聞こえてくる。その度、あの三人組に遭えるような気がして、さ迷いこんでみたくなる時がある。

広報委員 福井千春（経済学部教授）

編集室

《鈍感力》がにぎやかですね。「鈍感力が大事だ。支持率をいぢいち気にするな」と、小泉純一郎前首相が安倍晋三首相を励ました、というのが話題になった。

確かに、「やる気満々、敏感すぎる心は病気を招く」という説が免疫学の先端でも有力です。安保徹・新潟大学教授の「安保免疫学」によれば、心の病だけでなく、脳梗塞からがんの発生機序にも「自律神経」がかかわっているらしい。自律神経のうち、「交感神経」過多はやる気満々タイプ

プにみられ、ストレス性の胃潰瘍その他を誘発し、一方の「副交感神経」優位は逆に「ゆったり」タイプだが、過多になると、アレルギー性鼻炎その他につながる…。

なにか、「敏感力」＝「交換神経」、「鈍感力」＝「副交感神経」という類比ができそうです。

すると、中大の「なごみの風景」は「副交感神経」系優位の下さでしようか。要はバランスで、前首相も「鈍感力も」と言うべきでした。

社会への一步を「敏感力」で力強く踏み出し、ときに「鈍感力」でやりすぎず―《塩梅力》を期待したいところです。（広報課 田中紘太郎）

Hakumon

ちゅうおう

2007

早春号

2007年(平成19年)3月25日発行 No.200

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

広報課 ☎042-674-2146

印刷 泰成印刷株式会社
〒130-0026
東京都墨田区両国3-1-12
☎03-3631-8141